



土岐市	教育研究所
TEL	0572-54-1111 (内281)
FAX	0572-55-6310
メールアドレス	kyoiku@city.toki.lg.jp
所報	No. 541
発行責任者	所長 橋本 勇治
発行日	平成30年 9月10日
題字	山田 恭正 教育長

「三人寄れば生徒会の知恵」

土岐市教育研究所長 橋本 勇治

7月30日、「土岐市 夢と絆 中学生サミット」が肥田中学校図書室を会場として実施されました。今年度のホストは肥田中学校です。5名（3年生3名、2年生2名）の肥田中学校生徒会役員が企画、運営に携わってくれました。それ以外の中学校は、各生徒会代表3名が一堂に会しました。このサミットは「テーマについて交流することによって、自校の生徒会活動の活性化を図る。また、相互に刺激し合うことによって、各学校、さらには土岐市のリーダーとしての視野を広げ、資質や意欲を高める。」ことを目的としています。今年度のテーマは「生徒会が中心となって取り組むボランティア」でした。

各校生徒会の発表とアンケート結果の報告、テーマについての説明後、グループ別討議が行われました。同一校から参加している3名が、3つに分かれてグループを作り、肥田中生徒のコーディネーターで討議するというものです。

さすがに、選ばれた役員、選りすぐりのリーダーたちです。見ず知らずの他校生徒との関わりにも臆することなく、むしろ楽しみながら討議しているという印象でした。参観しながら、こんなに清々しい討議が実現できた理由は何だろうと、改めて考えていました。

- ☑参加者一人一人に、「自分はこうなりたい」という明確な願いや目標がある。
- ☑討議をコーディネートし、適切に進行するリーダーが存在する。
- ☑テーマとなっている活動の意義や目的、討議の目的など、「何のために」や「何を目指して」が理解されている。
- ☑「何を」「どんなふうに」討議するのかという、内容や方法などが明確になっている。
- ☑討議後に「新たな発見があった」「自分の考えが深まった」など、満足感や充実感がある。

何よりも、「交流することによって、自校の生徒会活動の活性化を図る」という目的が大筋で達成されたことを参加者全員で実感できたことがよかったと思います。通常では他校の生徒会活動

から刺激を受ける機会など滅多にありません。こんな貴重な機会を最大限に活用して、自校の生徒会活動に工夫を加えたり、新たな活動を生み出したりしようとしていました。まさに、「三人寄れば生徒会の知恵」といった風であったと勝手に思い込んでいます。

今回のサミットを語る上で、肥田中生徒会の功績を無視するわけにはいきません。彼らの企画・運営におけるリーダーシップ、よきコーディネーターぶりが、この有意義なグループ討議を実現したといっても過言ではないでしょう。ホストとしてサミットを企画・運営すること、学校の代表として討議に参加すること、そして、アイデアや刺激を自校に持ち帰ること。こうした経験を繰り返し、積み重ねて各学校、土岐市のリーダーが育っていくのだと思います。関係の先生方に感謝を申し上げつつ、今後の発展を心から祈っています。来年度は駄知中がホスト校。今から期待が膨らみます。



「天まで届け！僕の塔」

撮影者 下石小学校

佐々木 美樹 先生

高等教育の現況と今後の教育

土岐市教育委員 齋木 寛治

	1990年	2017年
18歳人口	約200万人	約120万人(40%減)
大学数	507校	780校(54%増)
大学進学率	24.6%	52.6%(約2倍)
学位名称数	29種	700種類以上(約24倍)
大学定員割れ		39.4%(310校)

この表はリクルート・カレッジマネジメント誌の記事です。この表を分析すると、1990年の人口は約200万人で大学数は500余。これが2017年になると人口は約4割減の120万だが、大学数は780まで増加した。マーケットでは考えられない状況である。これが保たれたのは、大学進学率が90年の24.6%から2倍の52.6%に増加したからである。大学は全入時代といわれ、定員割れした大学の割合は4割に達している。しかも私立大学では、入学者の過半数が学力試験の無い推薦・AO入試で占められているといわれている。さらに学部・学科の名称は2014年で700以上に成り、現在は800を超えている、このような驚異的な記事です。また、就職活動の現場では自分の学科が何を学ぶ学科かを説明出来ない学生もいると聞きます。2015年には、真意は別として文系廃止が報道され、大きな議論が巻き起りました。一方、エクセター大学のスティーブン・スミス学長は、2010年にニーズの高い仕事トップ10には2004年には存在していなかった業界が占めていたという事を、また、ニューヨーク市立大学のキャシー・デビットソン教授は、今の小学生が大学を卒業する時点、大体15年先だと思いますが、その時点で65%の生徒が今は存在しない職業に就くであろうと言っています。さらにオックスフォード大学のマイケル・オズボーン准教授は、今の仕事の47%は20年以内に自動化されるだろう、とも言っています。このように、今後世の中の仕事の質や量が共に大きく変わることを予言しています。これからの生徒や学生は、この時代の中で仕事をし、世の中を

渡っていかなくてはなりません「過去から学び、今日の為に生き、未来に対して希望を持つ。大切なことは、何の疑問を持たない状態に陥らない事である」と、アルベルト・アインシュタインは述べています。ところで、AI(人工知能)の発達により2045年には700万人以上の人々がコンピューターに仕事を奪われるという試算があります。例えば現在開発中の自動運転の自動車が実用化されれば、現在レベル4の実証実験を行っている、タクシーやトラックの運転手は必要なくなります。このような事例が至る所にあります。一般事務員、会計士、作業員など様々な職業がAIに取って代わると予測されます。以前工場など機械化により多くの人が仕事を失いました。700万という数字はともかくとして、AIを利用した機械、事務機、医療用等により、たくさんの職業を人間からAI機械に取って代わられるのは、遅かれ早かれどり着く未来である事は間違いありません。しかし、SE(システムエンジニア)など新たな雇用を創出する部分もあります。新しい仕事があるわけですが、しかし、新しい仕事ややりたい仕事か自分でこなす事が出来る仕事か問題になる所です。俗にいう、雇用のミスマッチです。

仮に、就職先があったとしても、その仕事をこなす事が出来るかは別問題です。さらに2045年問題、米国の数学者でSF作家のヴァーナー・ヴィンジ氏が1993年発表した論文で技術の指数関数的発達について述べ「機械がいずれ人間を上回る知能ばかりか、知識までも持つようになる」と予想したあたりから、はっきりと使われだした言葉です。人口減に加えて、AIやSEがそこまで来たのだから、小中高生はAI技術ではできない能力こそ修得すべきで、高度な読解力と常識、つまり言葉の「意味」を正確に理解して、「一を聞いて十を知る」応用力、柔軟性が必要です。人口減に加えAIやSEが進歩していく中、上手く利用して教育や働き方改革をしていきましょう。

濃南小・中学校連携教育の取組について

濃南小学校・中学校

1 はじめに

小中連携教育の取組を始めて3年目となる。2年目の昨年度は、願う姿や組織及び研究の全体像を明確にして実践を行った。運営組織を構築し、体制を機能させることで「理念・目的の共有」と「一人一人の職員の自覚と自ら役割を果たそうとする意識の高まり」が充実した。このことを中心に、教育の質を向上させ、一人一人に確かな力を身に付けるための取組等を以下に述べる。

2 これまでの成果

- (1) 研究授業の参観・研究会を積み重ねることで、職員の資質の向上となり、専門性の高さを生かすことにも結びついた。このことは、結果として職員の主体的な姿にもつながった。それにより、児童生徒一人一人の「できた」「わかった」「やってみよう」という姿に結びついた。
- (2) 「中学生は上級生としての自覚と責任をもち自信をもって活動に臨む。」「小学生は憧れを抱き、安心と希望を抱いて中学校に進級する。」といった児童生徒の意識の変容に結びついた。

3 今年度の方向

児童生徒一人一人が主体的に生きる力を身に付けていくために「兼務教員の有効な活用の仕方」「児童生徒のニーズに合わせた日常的な営み」について考え実施することを大切にしている。

4 学習づくり部

(1) 外国語活動の取組

① 専門性の高い指導



専門性の高い指導を行うために、休み時間や放課後に緻密な授業の打合せを行っている。児童生徒の実態に合わせ、つまづきやすい点やその

支援の内容、タイミング、評価内容などの役割分担を丁寧に打ち合わせている。

② 小中合同授業

小5・中1による外国語活動と英語の合同授業を行った。まず、小学生が色々な色や形を使ったクリスマスカードの絵を考え



た。次に、小学生は「What ~ do you want?」

の学習、中学生は「I want ○○。」の学習を生かし、買い物形式でやりとりしながらパーツを購入し、カードを作っていく活動を行った。最後に中学生が、完成したカードを全体に紹介した。中学生にとっては、小学生から得た情報をもとに既習の単語や表現を使って、即興で紹介文を考え発表するという学習となった。

(2) 読み聞かせ



中学校の図書委員会が中心となり、全校生徒で小学校の各学年に出向き読み聞かせを行った。小学生にとっては、本に親しめるだけ

だけでなく、中学生の子をより身近に感じ、憧れをもつことができた。中学生にとっては、話をしたり本を読み聞かせたりする表現の場ができたことよって、相手が喜ぶよりよい方法を考える機会となり、誇りや自信につながった。

5 生活づくり部

(1) 小中団結(合同)運動会に向けて

昨年度の取組を生かし、児童・生徒会が中心となってスローガン「繋〜つなが〜」を決定した。また、小中中学生共に結団式でスローガンを確認することで、運動会への思いを一つにする場となった。



(2) 小中合同合唱



中学生にとっても歌うことができる「濃南小学校校歌」を合同で歌う場を設けた。小中共に一つの歌を歌うことで、歌に込められた「濃南地区」のよさや思いが、中学生から小学生へと伝わる場となった。

中学生にとっても歌うことができる「濃南小学校校歌」を合同で歌う場を設けた。小中共に一つの歌を歌うことで、歌に込められた「濃南地区」のよさや思いが、中学生から小学生へと伝わる場となった。

6 今後について

今後も9年間で付けたい具体的な力を明確にしていく必要がある。そして児童生徒の意識や考えを大切にしながら連携内容を考えていきたい。

自己を見つめ、よりよい生き方について考えを深める児童の育成

土岐市立泉西小学校 教務主任 西 雅昭

1 はじめに

「まだ言いたい。」これは、全体交流が終わった直後、4年生男児がつぶやいた言葉です。本校では「考え、議論する道徳」の具現を目指し、日々授業改善に努めています。このつぶやきは、仲間と議論する楽しさを追究していこうとする授業実践から導き出されたものです。以下に、本校の研究の一端をご紹介します。

2 主題設定の理由

【研究主題】自己を見つめ、よりよい生き方について考えを深める児童の育成

本校の児童は、仲間のよさやがんばりを認め合えたり、教材を基に、自分の考えを持つことができるよさがあるものの、捉えた道徳的価値を自己の生き方と結び付けて考えたり、実践しようとする意欲に結び付けたりすることに弱さが見られます。そこで、授業においては、多面的・多角的な思考を引き出し、考えを深める学習活動の工夫を進めることとしました。また、全教育活動を通して道徳教育を推進し、自己を見つめ、よりよい生き方について考えを深める児童を育くもうと研究主題を設定しました。

3 研究内容の重点と実践

【研究内容2】多面的・多角的な思考を引き出し、自己を見つめ、よりよい生き方について考えを深める学習活動の工夫

(1) 道徳的諸価値を方向付ける導入の在り方

身近な場면을想起させるイラスト・写真を提示し、学習する内容項目に対しての意識をもたせました。そして、それに関わる姿や学級の実態を示し、自分の姿はどうか挙手で自覚させ児童の問題意識を引き出し、課題をつくりました。(自己理解)

また、話の世界に引き込めるように、教師が、物語の主人公になって寸劇をすることで、話の内容の理解がしやすく、主体的に物事を捉えることができました。2年生「くろぶたのしっぱい」の実践では、主人公がごみを捨てる場面を見ることにより、きまりを守らないと誰にどのような迷惑をかけるのかを理解することができました。(人間理解…道徳的価値は大切であってもなかなか実現することができない人間の弱さなどの理解)

(2) 道徳的価値について、深く考えるための学習活動の工夫

ペアで役割演技をし、登場人物になって会話をすることで、仲間の意見に気付き、自分の考えを深

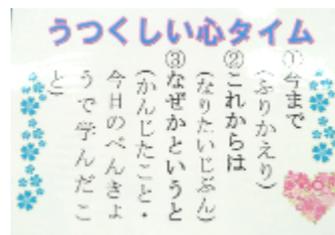


めることができました。4年生「どっちがいいか」の実践では、赤白帽子をかぶって自分の立場を明らかにし、スクランブル交流を行うなどの工夫もしました。(他者理解)

また、モデルとして代表児童と教師との対話活動を示した後で、主人公の立場として、どう思ったか、どんなことが分かったか確認することで、価値に迫ることができました。(価値理解)

(3) 自己を見つめ、よりよい生き方を考える学習活動の工夫

自己見つめの時間を「美しい心タイム」とし、書く時の視点を与えました。すると何を書けばよいか



が明確になり、自己を見つめ、振り返りや自分の考えを書くことができるようになりました。6年生「夢に向かって～三浦雄一郎～」の実践では、「私は楽な道を選んでるので、夢のためにもつらい方を選んで努力したいです。」という記述がありました。(自己理解)

4 おわりに

1学期末に「道徳アンケート」を行いました。以下が道徳の授業が楽しい理由の上位でした。

- ・自分の意見を話せる。(低学年)
- ・他の子の考えを聞ける。(中学年)
- ・自分のこと(生活)を考えられる。(高学年)

発達段階に合わせ、道徳の授業づくりを進めてきた成果が少しずつではありますが表れつつあります。まだまだ道半ばではありますが、今後も話し合うことで考えを深めていこうとする授業実践を積み重ねていきたいです。

6月4日に学力向上企画委員で京都市立洛央小学校の視察を行った。洛央小学校では、学校独自に「のびのびトレーニングタイム」と称した活動を行っている。授業を参観して学んだことと、京都市学校歴史博物館の見学から読み取れる京都市の教育について、併せて報告をする。

I 洛央小学校の視察

1 洛央小学校の特色ある活動

「のびのびトレーニングタイム」

洛央小学校では、平成26年度から週に30分程度「のびのびトレーニングタイム」が設けられている。「のびのびトレーニングタイム」とは、説明・比較・分類・対話型鑑賞・提案など、思考や表現のスキルを仲間と共に獲得するためのトレーニングである。設定されたテーマに沿って、一人一人が考えを出し合い、チームで「みんなの考え」としてまとめていく中で、お互いの意見をクリティカル（批判的）に見たり、ロジカル（論理的）に意見をまとめたりすることを通して、思考力・表現力・協調の技能を高めることを目的としている。洛央小学校は、かつてより理科の研究に力を入れており、ロジカル・クリティカルに思考・表現する力は、理科の授業だけでなく各教科の授業においても系統的に育成する必要がある、と考えたことからこの取組は始まっている。新しい学習指導要領では、教科横断的に資質・能力の育成を目指す視点が盛り込まれている。洛央小の取組は、平成26年度の時点で資質・能力の育成を目指して、カリキュラムマネジメントを行っている点で、非常に先進的な取組がなされているといえる。

2 「のびのびトレーニングタイム」の参観

小学校4年生の「のびのびトレーニングタイム」を参観した。課題は「給食とお弁当を比べて、学校の昼食にどちらがよいか説明しよう」であった。「どんなことに気をつけるか」が時間の流れと

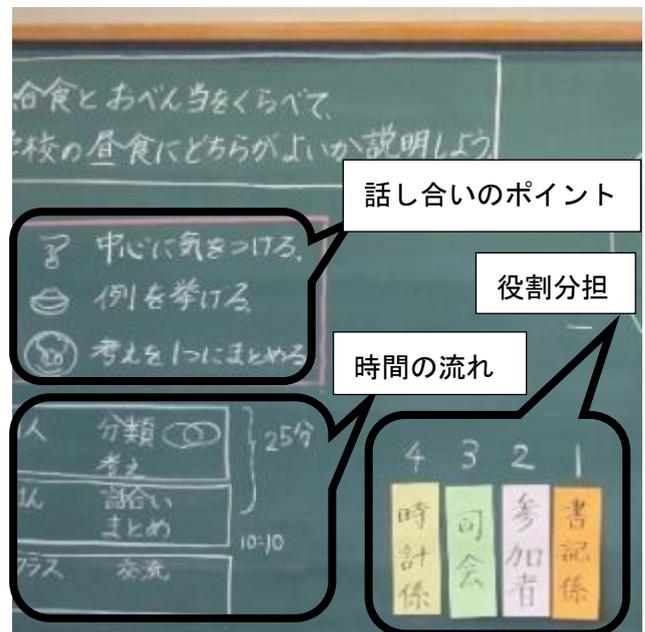


図1 板書の様子



図2 ワークシートへの記入



図3 班での交流



図4 全体交流

もに教師から示された後、班での役割を確認して活動がスタートした(図1)。子どもたちが一人で考えベン図に書き込み(図2)、時計系の合図で話し合いが始まった(図3)。給食とお弁当それぞれ

のよいところとよくないところ、共通することを司会がまとめ、書記係が班のワークシートに書きまとめた。全体交流(図4)では、班の代表が発表し、それに対しての質疑応答が行われた。最後にめあてについての振り返りを記述し「のびのびトレーニングタイム」が終了した。

3 参観から学んだこと

- ・育成したい資質・能力を明確に示し、どの教科にも生かせる活動を全校で取り組んでいる。また、それが系統的に行われている。
- ・話し合う活動の際に、思考を可視化できるようなワークシートが工夫(ペン図、マトリクス等)されている。そして、話し合ったことがワークシートやホワイトボードなどで記録として残され、仲間同士で共有できている。そのため、単に話して終わりという活動になっていない。
- ・授業の始めに、活動の流れが位置づけられている。それによって、子どもたちは時間の見通しと、次に何をするのかを理解して活動ができている。それは、同時に行われていたどの学級でも同様に位置づけられていた。
- ・振り返りはワークシートに必ず位置づけられている。「できるようになったこと、つぎにがんばりたいことなど」を記述するようになっており、子ども自身が自分の学びを確認する場となっている。
- ・児童のアンケート調査によりのびトレの成果を客観的に検証している。
- ・校長先生は洛央小に担任として赴任し、そのまま、教頭、校長となっている。そのため、学校の状態をよく理解し、中長期的な視点でのマネジメントがなされている。

洛央小の実践から、今後の授業改善のヒントとなるものが得られた。特に、上記波線部は土岐市指導改善プランの〈指導改善のポイント〉に通じる場所であり、すぐにでも取り入れて実践することができそうな内容であった。

II 京都市学校歴史博物館の視察

1 京都市の学校の歴史

京都市では、日本で学制が公布される前の明治2年から、学区制の小学校がつくられた。これらの小学校は、町内の組である「番組」を学区としてつくられた番組小学校として始まった。64の番組小学校が開校した。小学校は自治会によって運営され、その費用も有志により寄付されたものであった。また、小学校は教育機関としてだけでなく、警察や町会所、望火楼などの機能を併せ持っており、総合庁舎のような役割を果たしていた。

2 京都市の学校の特徴

京都市の学校の歴史的背景から、町の住民により運営されてきたことが現在にも大きく影響していると思われる。その大きな特徴が学校運営協議会(コミュニティースクール)の設置である。市内全小学校に設置されており、地域の住民が「自分たちの学校」という意識をもって学校の運営に積極的に参加していることがうかがえる。近年では、学校運営協議会と学校の連携が図られることで、学校の評判が上がり、わざわざその校区に引っ越してくるなど、人口が増加している学区もある。

また、各学校が様々な特色を打ち出している。視察をした洛央小は「のびのびトレーニングタイム」の実践を行っているが、同じく市内の御所南小では「読解科」という独自の教科をつくり、読解力の育成を図っている。これらは、教育委員会の主導で行われているわけではなく、各学校の工夫により行われている。各学校が明確な学校運営方針を打ち出し、それぞれが組織改革やカリキュラムマネジメントにより特色ある教育実践が行われている。

京都市の学校は、今回視察を行った洛央小学校だけでなく、学校の特色を打ち出し、それが地域の支持を受け、地域を含めた協力体制を築き上げることで好循環を生み出していると感じた。

「ある詩との出会い」

土岐津中学校 校長 佐藤 勝也

海の水は塩っ辛くて、
これを甘く変えることは
不可能である
あなたが手のひらに
角砂糖を一個持っていて、
それを浜辺から
ポチョンと
海に投げ入れた
なめてみる
海水は以前と変わらず
塩っ辛い。
だけど海は、
あなたが投げ入れた
角砂糖一個分、
確実に甘くなっている。

この詩は私が若い頃、先輩の先生から教えていただいたもので私が大好きな詩の一つです。出展も作者もわかりませんが、何度となく部活動や学級や学年の生徒にこの詩を使って話をしたことがあります。そうするとその次の日から、一人また一人と角砂糖を投げ込む生徒が増えていき、その集団の雰囲気が変わっていったことを覚えています。誰も見ていなくても、コツコツと、黙々と自分が決めたことをやる。自分だけはこうありたいという思いで・・・。

たった一人だけでも、たった一人になっても、あきらめたり、投げ出したり、失望したりしないで、前向きに考えて行動していこうと言う気持ちになれる生徒を一人でも多くしたい。

私たち教師も、あきらめたり、投げ出したり、失望したりしないで、前向きに考えて生徒に接していきたい。そうでありたいと思っています。

新しいALTを紹介します



マッカーシー・ローガン・ブライアントさん（25歳）

Hi! My name is Logan. I am from Boston, Massachusetts in the USA. I learned a Bachelor's degree in Graphic Design & Media Arts at Southern New Hampshire University. I love to play the piano, sing, draw, and study Japanese. In the States, I taught both English and wildlife studies in New England. I can't wait to meet everyone and teach English here!



ブラウマン・オリビア・マーガレットさん（22歳）

Hello, my name is Olivia! I am from Maine, a state in northeast America. I studied Japanese and Linguistics at the University of Massachusetts Amherst. I also studied abroad at Nanzan University in Nagoya! I like to listen to music, read, sing karaoke, and write stories. I am looking forward to meeting all of the students and teachers, and teaching English!